

## 保育者養成校における学生の人権意識

外崎 紅馬  
(日本大学大学院)

### I. 研究の社会背景

現代社会は、科学技術の高度化と産業構造や就業構造の急速な変化、それにとまなう情報化、国際化の進展に加えて、高齢化、少子化、核家族化等の進行により家庭扶助機能の低下や地域における相互扶助機能の低下がみられ福祉ニーズもまた多様化し、少子高齢社会の到来を背景に福祉環境も大きく様変わりをしてきている。今日、保健衛生の向上や医療技術の進歩、社会保障制度や各種サービスの充実と普及などによる生活環境の大幅な改善は、乳幼児の死亡率のみならず、青年期・壮年期の各層の死亡率も低下させ、各世代の平均余命の伸びにより日本は世界で最も平均寿命の長い国、いわゆる最長寿国となった。しかし、平均寿命が80歳を越え、世界一の長寿国になりながらも、寝たきり高齢者や痴呆症の高齢者の増加など、以前から指摘されている老老介護の問題をはじめとした介護等に対する課題が存在し、楽観的ではいられない状況といえる。加えて、核家族化の進行による家族形態の変化と、少子化による家族の構成員の減少は、家庭内の介護力を低下させるなど、家族で介護を行えない家庭が徐々に増えてきている。

また、人は高齢になっても、疾病や事故等により障害をもつに至ったとしても、住み慣れた地域で自立した生活を送りたいと願うものである。仮に家庭内で十分な対応ができない場合、地域に求められるものは、社会資源を有効に活用し生活全般にわたる援助体制と個人、家庭、地域それぞれのニーズの充足に役立ちあう共生的関係である。住み慣れた地域で自立して生きがいをもって生活しようとする高齢者や障害者の社会的関わりを損なうことなく、いかに援助し支援していくかという「権利擁護」に対する関心は年々高まりをみせている。

### II. 研究の目的

現代社会における急激な科学技術の高度化や情報化、少子高齢化の進行は、個性の喪失、人間疎外、世代間の断絶、地域連帯意識の減退など、人々の生活全体に広く深く関わるようになってきており、それにとまなう複雑多様化した生活問題は福祉ニーズを増大させ、深刻化させている。とりわけ、高齢者や障害者など要

援護性の高い人たちの生活問題は、社会関係上の障害等固有の背景を踏まえて、その尊厳や権利の擁護と、自立的な生活の充実のための援助や支援に対する社会的要求が、その重要性とともにますます高まってきている。このような状況のもと、保育士を含めた社会福祉従事者は、福祉ニーズのある福祉利用者との対等で平等な人間関係や利用者の尊厳、自己実現の尊重などを重視した明確な倫理に基づいた実践行為が求められている。とりわけ、保育士の言動や態度、行動は、具体的な行動様式として児童に観察され、ときには模倣されることも珍しくないため、保育現場における保育の実践過程において、高齢者や障害者等に対する保育士の権利擁護意識が偏った理解や個人的な感情にとらわれていないか十分な配慮が必要となる。

そこで、保育士の権利擁護意識が児童に与える影響を重視し、本研究では保育者養成校における学生の人権意識について調査を行い、今後の人権教育の内容を考察するための資料を得ることを目的とする。

### III. 調査の概要

#### 1. 調査対象と方法

調査は、保育士を養成している専門学校A校に在学する学生82名を対象とし、質問紙法による集合調査を実施した。

#### 2. 調査内容

高齢者や障害者等の福祉施設で行われている処遇について、人権侵害と思う事柄に対し自由記述による回答を求め、学生が人権についてどのような認識をしているのかを調査した。

#### 3. 調査の時期

調査は2002年9月に実施した。

### IV. 結果と考察

自由記述方式で回答を求めた結果、その記述内容は多岐にわたるものとなったが、その内容を整理すると、いくつかのカテゴリーに分けることができ、そのカテゴリーは、①「食事の場面」、②「入浴の場面」、③「排泄の場面」、④「余暇活動の場面」、⑤「職員の倫理的態度」の5つの項目に分類された。また、⑤「職員の倫理的態度」以外のその他の4つの項目については、

さらに「施設職員の処遇に対する内容」と「施設利用者（入所者）の立場にたったの内容」との2種類の観点がみられた。

#### (1) 食事の場面

##### ① 施設職員の処遇に対する内容

施設職員の処遇について、食事の場面において人権侵害と思われる回答の主なものは、「口の中にまだ食べ物が残っているのに、次をすぐたべさせる」「むせているのに食べ物をつめこむ」「食べないと怒る」「利用者のペースではなく、職員のペースで食べさせている」「時間内に決められたものを食べさせることだけを考えた介助」など、決められた食事の時間内に、決められたものを食べさせることを優先し、利用者のペースではなく職員のペースで介助が行われていることに権利の侵害を感じている。

##### ② 施設利用者（入所者）の立場にたったの内容

施設利用者（入所者）の立場にたった、食事の場面において人権侵害と思われる回答の主なものは、「食べたくないのに食べさせられる」「食べたいものが食べられない」「食事の時間が決められている」など、好きなものを自分の好きな時間で食事することができない不自由さに権利の侵害を感じている。

#### (2) 入浴の場面

##### ① 施設職員の処遇に対する内容

施設職員の処遇について、入浴の場面において人権侵害と思われる回答の主なものは、「ごみ、髪の毛が浮いているなどお風呂が汚い」「入浴するまで裸でしばらく待たせる」「体をしっかり洗わないで簡単にすませる」「体をきちんと拭いていないのに服を着せる」「見学者に入浴している様子を見せる」など、不衛生な状態、流れ作業的な介助、プライバシーへの配慮の欠如などに権利の侵害を感じている。

##### ② 施設利用者（入所者）の立場にたったの内容

施設利用者（入所者）の立場にたった、入浴の場面において人権侵害と思われる回答の主なものは、「好きなきに人浴できない」「ゆっくり入れない」「毎日は人浴できない」など、食事の場面と同様に、自分の生活嗜好にあわせて入浴することができない不自由さに権利の侵害を感じている。

#### (3) 排泄の場面

##### ① 施設職員の処遇に対する内容

施設職員の処遇について、排泄の場面において人権侵害と思われる回答の主なものは、「くさい、きたないと言う」「嫌な表情をしながら介助をする」「おむつ交換の時間までそのままにしている」「交換したお

むつをいやそうに持っていく」「プライバシー保護のためのカーテンを使用しない」など、排泄という人間の尊厳に深く関わる場面における、利用者の羞恥心等への配慮の欠如などに権利の侵害を感じている。

##### ② 施設利用者（入所者）の立場にたったの内容

施設利用者（入所者）の立場にたった、排泄の場面において人権侵害と思われる回答の主なものは、「介助してもらいたいときに、やってもらえない」「おむつを強制される」「行きたくもないのにトイレに連れていかれる」など、自分の意思に反した介助が行われることに権利の侵害を感じている。

#### (4) 余暇活動の場面

##### ① 施設職員の処遇に対する内容

施設職員の処遇について、余暇活動の場面において人権侵害と思われる回答の主なものは、「その人にあった余暇活動を提供していない」「職員が話し相手になっていない」「利用者が痴呆の場合など、話しかけられても無視する」「レクリエーションなど強引に楽しませようとする」など、対話の不足や、利用者の希望にそぐわず、余暇がQOL向上の実現に不十分な状態であることに何らかの疑問を感じている。

##### ② 施設利用者（入所者）の立場にたったの内容

施設利用者（入所者）の立場にたった、余暇活動の場面において人権侵害と思われる回答の主なものは、「部屋に何も言わずはいってこられる」「ひとりになれない」「生活リズムを施設の日課にあわせなければならない」など、プライバシーやプライベートな空間と時間の確保が充分でないことに権利の侵害を感じている。

#### (5) 職員の倫理的態度

施設職員の倫理的態度について、人権侵害と思われる回答の主なものは、「陰で利用者の悪口を話す」「利用者の私的なことを、他の利用者の前で話す」「利用者の意見にきちんと耳を傾けず、適当にあしらっている」など、専門職としてその倫理観の欠如した態度や行動に利用者に対する権利の侵害を感じている。

## V. おわりに

保育者に求められることは、人間尊重を第一義として、生活のあらゆる場面で誰にでも起こり得る人権問題に対し、その権利を擁護するとともに対等で平等な人間関係、人としての尊厳と自己実現の尊重など、生存権への理解が不可欠である。今後、今回の調査で得られたデータをもとに各場面における要因間の関係性を分析し、人権教育の内容を検討していきたい。